



野比中だより

絆 きずな  
—響き合いを大切に—

横須賀市立野比中学校

〒239-0841

横須賀市野比4-4-1

tel:046-849-3318

Fax:046-849-3791

## 月日は百代の過客にして

「月日は百代の過客にして、行き交ふ年もまた旅人なり」

(月日は永遠の旅人であり、やってきては過ぎていく年も旅人である)

この文章は、松尾芭蕉が記した『おくのほそ道』の冒頭部分です。彼が旅に立つ前の気持ちを記した文章として知られています。中学校3年生の国語科の教材になっています。(3年生のみなさんなら、意味はバッチリかな?)

『奥の細道』は、江戸中期、元禄2年(1689年)3月、松尾芭蕉が門人の曾良と江戸深川(現在の東京都江東区あたり)を出発し、現在の東北地方や北陸地方の名所・旧跡を巡ったとされる旅について、発句をまじえて記した紀行文です。期間にしておよそ150日、5か月間にわたる旅の道のりは、2,400キロにもおよび、1日に30キロから40キロほど歩く日もあったそうです。

卒業を迎えるこの時期に、なぜかこの「月日は……」のフレーズが頭をよぎります。

松尾芭蕉にとっては、この書き出しの部分は、自分自身が旅人であるとして、その心境を表している文章です。しかし、私自身は旅をしているわけではありません。むしろ野比中学校を出発しようとする旅人=卒業生をこの時期に多く見ていて、送り出す側の心境として、「月日は……」の書き出しが私の心境によくマッチしているなど感じているのです。

ちなみに「奥の細道」というタイトルの意味

は、東北への細い旅の道という意味なのだそうです。「奥」は奥州の「奥」、東北地方、つまりみちのくをさします。みちのくは陸奥と書くこともあります。また「細道」は、文字どおり細い道。ここでは、松尾芭蕉にとって、心細い、たよりにならないような道ということを表しているのかもしれませんが。

3年生にとって、4月からの生活はどのようなものになるでしょう。4月になって、次のステージの生活が始まってしまえば、それなりに過ごすことができるかもしれませんが、今の段階では、とても楽しみでもあり、全くの未知、不安も多いのではないかと思います。そういう意味では、松尾芭蕉にとっての「奥の細道」を出発するときの心境にも似ているのかもしれませんが。

松尾芭蕉にとっては、俳句を詠みつつ、各地の名所を巡るといふ、あこがれの旅行でもありました。3年生のみなさんにとっても、あこがれの生活であるはずです。松尾芭蕉は困難の末に「奥の細道」という大作を完成させることにもつながりました。3年生一人ひとりにとってかけがえのない大作を生み出す旅となることを祈っています。

## ほらね、

「頭をよぎる」シリーズとしては、歌があります。今年度は、保護者の方に野比中学校の合唱祭を参観していただくことができましたが、私はもともと「合唱」が大好きです。時々、「大きな声で思いっきり合唱したいなあ」という

欲求で我慢できなくなりそうなときもあります。そんな時は、学校からの帰り道に尻摺坂あたりでそっと口ずさんでいるのは内緒です。最近頭の中をぐるぐる巡っている曲があります。それは『ほらね、』という曲です。



この曲は東日本大震災のあと、歌で日本をつなげよう、歌で被災地を応援しようと企画されたカワイ出版の「歌おう NIPPON プロジェクト」のために書き下ろされた作品です。作詩は合唱指揮者の伊東恵司さん。作曲は松下耕さん。震災の被災者はもとより、多くの人々の心をあたたかく包んで優しい気持ちにしてくれる曲です。

作曲の松下さんは、

合唱に普段接していない子どもたちでも、歌うことで人と人がつながっていけることを実感してほしい

とおっしゃっています。

歌のもつ力は、計り知れないものがあります。歌う人、聴く人の気持ちによって、感じ方は色々だと思います。しかし歌に表現された言葉を通じて、人と人のつながりを作ることができます。3月12日の卒業式では、どんな歌を3年生が聴かせてくれるのか、実はとっても楽しみなのです。

## 感謝の気持ち

3月は別れの季節。いよいよ3年生が旅立つ時がどんどん近づいてきています。別れを

迎えるのは卒業式の主役である3年生だけのものではありません。送る人と送られる人がいて、はじめて別れが成立します。ですから、式に参加する2年生はもちろん、自宅学習をしている1年生も3年生との別れには大切な存在です。

さて、その際に思い出してほしいのは、共に過ごした日々なのです。共に過ごした日々は、よくよく考えてみると、野比中でしか得られない貴重なものなのです。同じように神明中には神明中の、長沢中には長沢中にしかない貴重な経験だということも言えるのですが、それは似ているかもしれないけれど、全く違う経験なのです。このメンバーがそろったときにしか経験できないことであり、昨年とも違うし、来年とも違うはずです。そういう偶然に感謝したいと思います。

さて、感謝の気持ちは感じるだけでは全然足りません。相手に伝えてこそ、感謝の気持ちなのです。

これまでの野比中の生活を振り返ってみて、先輩や後輩、そして普段一緒に生活している友だちにどれくらい「ありがとう」と伝えられているか思い出してみてください。そんなの当たり前だし、今更恥ずかしいよ、ということがあるかもしれない。でも感じているだけでは足りないのです。せつくなので、この別れのタイミングを使って、その感謝の気持ちを伝えてみませんか？

感謝の気持ちを伝えるべき相手は、友だちだけではありません。もっと大切な相手があります。それは家族です。

ご飯を作ってくれてありがとう  
美味しかったよ

洗濯、ありがとう 気持ちよく運動できたよ

起こしてくれてありがとう

ありがとうの気持ちはたくさんあります。家族だから当たり前じゃん、と思っていることにこそ、とっても大切な「ありがとう」があります。今だからこそ、声にしてみませんか？

あなたが好き 私が好き 横須賀が好き と誇れる人づくり